近代史の中の東亜同文書院

國學院大學講師　栗田尚弥

栗田

栗田でございます。今日は「近代史の中の東亜同文書院」ということでご報告致したいと思っております。この会場に書院ご出身の方は当然いらっしゃると思いますが、この書院出身の方にとられましては、戦後は非常に辛いというようなことが長い間おありになったことだろうと思います。どういうことかと申しますと、東亜同文書院は日本の国策にずいぶん貢献をした。そしてそれゆえ、同文書院は日本帝国主義の尖兵であり、スパイ学校であり、あるいは植民学校であるというような評価がまかり通っていたからです。ごく最近までこのような評価が行なわれていたわけです。

例えば朝日新聞社から出ております『近代日本と中国』（上・下）という本がございます。竹内好先生と橋川文三先生が編者になられているわけですが、元々『朝日ジャーナル』に連載されていたものです。ところが『ジャーナル』連載中には東亜同文書院が入っておりましたが、それが本になる時は当時の学界の動向を危惧して、結局同文書院は本のなかには入らなかった、と聞いております。確かに東亜同文書院ご出身の方々の中国に関する知識・情報は非常に豊かなものですから、結果として日本の国家の政策に貢献したということは否定できないと思います。例えば、書院卒業生の昭和一〇年代の就職先を資料的にまとめてみましたが（資料①）、これを見ますと確かに、満洲方面の国策企業が多いわけです。

ただこれをもって日本帝国主義の尖兵であるとか、スパイ学校とか、植民学校とか、そういう評価ができるのか、という疑問を私は常々感じております。少し変な言い方ですが、日本の国策に協力した、あるいは貢献した、ということであれば、一番の国策大学は東京帝国大学ではないか、ということになるわけです。ここで、特に問題にしたいのは、要するに同文書院というものを歴史上に位置づけようとするならば、書院や書院の関係者、出身者が、近代の日中関係史にどのように、またどのような思いをもって関わったかということに踏み込んで考える必要があるのでは

ないか、ということです。この視点から今日はご報告致したいと思っています。

東亜同文書院、あるいはその経営母体となる東亜同文会について語るには、同文会ができる以前にもう亡くなっておりますけれども、「原初の大陸浪人」と言われている、荒尾精という人物について語らなくてはいけないと思います。「大陸浪人」という表現を使いましたが、彼は昭和期の大陸浪人とは識見・品格とも全く異なります。荒尾は、尾張藩士の子として現在の名古屋市に生まれました。そして当時士族の師弟の多くがそうであったように、軍人を志して軍の将校に任官するわけです。非常に優秀な人物でありまして、当時の参謀次長であった川上操六に目をかけられて「中国に行って中国の事情をいろいろと研究してこい」という命令を受けて中国に渡りました。

ここで楽善堂という上海に支店のあった会社が登場します（本社は東京銀座）。楽善堂というのは現代で言いますと総合商社といったところでしょうか、中国のものを日本で販売し、日本のものを中国で販売する、そういう会社です。この会社を営んでいた岸田吟香という人、この人は楽善堂の仕事のほうでも有名ですが、一方明治を代表するジャーナリストであり、東亜同文書院大学の経営母体である東亜同文会の創立メンバーとしても有名です。因みに女優の岸田今日子さんのおじいさんです。

荒尾はその岸田吟香の知遇を得まして、やはり楽善堂の支店という形で現在の武漢市の漢口地区に漢口楽善堂を開き、商業活動のかたわら情報の収集を図りました。彼のもとには軍人ではありませんが、明治から大正にかけての日

中関係史に登場する錚々たるメンバーが集まりました。例えば宗方小太郎とか高橋謙とか、そういう若い人達が集まって荒尾とともに中国の情報を集めました。あるいは、中国の有志との接触を計る。そういうことをやるわけです。その結果として、荒尾は帰国して一八八九年（明治二二年）、日清戦争の始まる数年前ですが、「復命書」というものを参謀本部に提出するわけです。

この中にどういうことが書かれているかと言いますと、清末中国の末期的な症状。官僚が腐敗しているとか、民衆が非常に圧政によって苦しんでいるとか、列強の帝国主義的政策というような話から始まりまして、さらに、日本の使命としてこの中国の現状をどうにか変革して、それを梃子としてアジア振興のきっかけを作る、というようなことです。具体的にはどういうことをやるかと言うと、ある程度帝国主義の本質を突いていると思うんですが、ヨーロッパ列強から中国における商権を回復する、では、そのためにはどうするかと言うと、日中間の貿易を盛んに行なうことによってお互いに経済的に豊かになり、強くなった上でさらに手を組んで列強の帝国主義に対抗する、というようなことが書いてあります。

ただ現状を見た場合、中国は荒尾の報告書にあるような状態です。また、日本も明治維新から二二年しか経っていない極東の極小国です。実際には遠大な理想を抱いても、人材不足です。そこで、まず貿易によってお互いが貿易富国を実施するための人材を養成しなければいけない。日清貿易のエキスパートを養成する必要があるということで、上海に日清貿易研究所という研究機関兼学校を荒尾は創設するわけです。これが歴史の中で、東亜同文書院の前身と言われている学校です。

結局、日清戦争の少し前に日清貿易研究所は閉校するわけですが、荒尾はこの研究所を設立して日清貿易のエキスパート、さらには日中提携の基礎となる人物を養成しようと考えたわけです。そして、所長には荒尾精が、代理所長には陸軍士官学校時代以来の同士である根津一（後に同文書院院長）が就任しました。

この荒尾が日清貿易による富国論を説いたのは、単に日本のためだけではないのかという批判も確かにございますが、私はそうではなく、やはり日清両国の富国にあったと捉えています。それはなぜかと言いますと、一八九四年（明治二七年）から一八九五年（明治二八年）にかけての日清戦争の結果、日本の資本主義というのは確立するわけですが、この時に荒尾は二つの意見書を出しております。一つは日清戦争のさなかに書かれた「対清意見」ですが、これはいわば「日清戦争義戦論」でありまして、戦争は、日本の為の戦いではなくて、腐敗している清朝を倒して中国の開明的な人々が新たな時代を作るためのきっかけとなる。そして、中国の圧迫されている民衆を解放することになる。そういう意味で義戦である。思想的背景は違うんですが、同じようなことを内村鑑三が言っています。

決して口先だけの義戦論ではなかった証拠に、日本人の兵士も多く亡くなって日本もお金を使っているわけですが、それでも正義の戦いである以上、そして中国を覚醒させるための戦いであり将来の日中提携の基礎を築くための戦いである以上、日本がいくら犠牲を払ったとしても領土の割

譲を絶対に要求してはいけない。それから賠償金も絶対に受け取ってはいけない、という論調の「対清弁妄」というものを日清戦争後に発表しているわけです。彼は終始領土割譲、賠償金要求ということに反対しています。惜しくもこの「対清弁妄」を書いた翌年、彼は台湾で客死してしまいます。

この荒尾の死を非常に悼む人物、若き政治家が一人いました。私は思想的に荒尾の後継者として見てもよろしいと思いますが、それが近衛篤麿です。ここにご参集の皆さんには、今さら何だという方が多いと思いますけれども。五摂家筆頭近衛家の当主であり、貴族院議長等の要職を歴任してきた近衛篤麿です。彼がこの荒尾の死を非常に悼んでいるわけです。

近衛篤麿というのはどういう人であったかと言うと、教科書的にはロシアに対する強硬姿勢、対外硬論者として有名ですが、単にそれだけの人ではなくて、ご存じの方も多いと思いますけれども、若い時にヨーロッパに留学し、博士号を取っているような人物です。そしてヨーロッパの議会主義、立憲君主制ですね、日本も議会制を取り入れなくてはいけないということを主張しています。政党で言うと自由民権運動の流れを汲む進歩党→憲政本党に近く、大隈重信とも仲が良かった。彼は、議会主義の推進者の一人でした。伊藤博文や山縣有朋といった元老にとっては、目の上のたんこぶ的存在でした。民間人であるならば国家権力によって潰せるわけですが、天皇家に一番近い家柄でしたから潰せない。別の言い方をしますと、近衛は自分の五摂家筆頭という立場をいい意味で利用して、国論喚起に務める、というところがあったろうと思います。

彼について日本思想史上最大の巨人の一人と言われている、この人は左右両方の研究者から非常に高い評価を受けている人物ですが、中江兆民が死の半年ぐらい前に書いた「一年有半」という論説の中で、「現代の政治家の中で頼りになるのは近衛公くらいのものだ」というようなことを書いています。兆民はその時余命一年半と宣告されておりました。その状況の中で、近衛が中心となった国民同盟会を積極的に応援するわけです。そういう点から見ましても、近衛というのが単なる対外硬論者ではないということが分かると思います。

このようにヨーロッパの議会政治、そして日本にも議会政治を導入しなければならないということに対しては近衛は前向きで、ヨーロッパを評価しています。しかし、その反面気に入らないところもあると言っています。それは何かと言うと、白人帝国主義なんですね。例えば、ヨーロッパに留学する途中広東に寄った時に、そこにフランスの国旗が翻っているのを見て、非常に義憤を感じたというようなことを書いています。それからまたヨーロッパに行った時に、子供にすらイエローであるといったことで馬鹿にされた、と祖父に義憤を交えて書き送っています。近衛は、白人の人種主義と言いますかレイシズムと言いますか、そしてそれに裏打ちされた帝国主義的な対アジア政策、それに非常に幻滅するわけです。

同時に、近衛は日清戦争後の日本人、それから日本の政治家同胞に対してかなり憤るわけです。と言うのは、同じ有色人種として、日本は白人の帝国主義に抵抗しなくては

いけない。そのためには彼の言葉を借りれば、同人種が結んで白人帝国主義に抵抗すべきである。にも関わらず日本人はどうか。まさに欧米の後塵を拝する形で中国を分割、当時の言葉を敢えて使いますと「支那分割」に加担しているではないか。彼の言葉を借りますと、「欧洲人と合奏して支那亡国を歌ふの軽浮」を日本人は犯している。これをどうにかしなければいけない、ということで非常に憂慮する。雑誌『太陽』に書かれた「同人種同盟、附支那問題研究の必要」という論文です。

そして、そこから進んで彼は、では何で日清戦争後日本は「欧洲人と合奏して支那亡国を歌ふの軽浮」を犯すようになったのか、それはやはり戦勝による軽薄な浮かれ気分である。それともう一つは維新後の日本人には、場合によっては滑稽とも思われるような欧化主義、何でもかんでもヨーロッパという方向に走る反面、隣国の中国とか朝鮮半島に対しては何も研究しようとしない。それが最大の原因ではないかということを言っています。そして、このような状態を打開するには中国やアジアを知らなければいけない。では、どうするかと言うと、「支那」(と言っても広くアジア全体と思いますが)の諸問題の真相を研究する機関を作らなければいけない、ということになるわけです。そこで作られるのが東亜同文会です。これは同じ年に近衛が作った同文会という団体と、その前年に犬養毅や福本日南などが組織した東亜会というような団体がございますが、これが合併して一八九八年(明治三一年)に東亜同文会として組織されるわけです。

東亜同文会の「設立趣意書」等は資料編(資料②)にまとめておきましたのでじっくり読んでいただきたいのですが、「発会決議」の中では「支那の保全」というようなことが書いてあります。では、東亜同文会の具体的事業はと申しますと、中国研究のための研究会とか雑誌の発行(『東亜時論』等)、それから国内における留学生のための学校をつくるとか、そういう文化事業が中心です。

その東亜同文会の活動の中で、一番重大な活動が南京同文書院の設立であります。この要綱と言いますか、設立の「興学要旨」も資料のなかに入っております(資料③、以下略)。そこには、日中の英才を教えて、日中友好の基礎をつくるという目的で南京に同文書院を設立したとあります。ただご存じの通り義和団事件というのが勃発しますので、結果としてこの南京同文書院に中国人学生が入学することはありませんでした。これはのちに東亜同文書院中華学生部という形で実現するわけです。

今、義和団事件ということを申し上げましたけれども、南京にあった同文書院がこの事件によって上海に移転し、東亜同文書院になるわけです。そしてご存じの通り終戦に至るまで約五千名の、日中関係、あるいはアジア関係のエキスパートを養成する学校になります。

その同文書院教育の特色ということを私なりにまとめてみました。まず第一に、この同文書院を語る場合に忘れてはならないのは、初代院長の根津一であります。初代院長と言いましても事実上は四十数年の書院の歴史の中で半分は根津院長時代ですので、結局院長を退職した後もその影響力は終戦まで残る。根津自身は山東出兵があった昭和二年に、一九二七年に亡くなりますけれども、根津から教え

を受けた人が書院の教員になっている。そういう形で根津精神というものが書院のバックボーンになっていたということは否定できないと思います。

その根津一の考え方ですが、いくつか私が特徴的だと思った点を掲げてみます。一番大きな点はやはり、基本的に東洋の哲学ですが、「王道論」に基づいているということが言えると思います。「中国革命の父」孫文は非常に王道ということを強調しました。そのことについては藤井先生のほうがはるかにお詳しいと思いますけれども。例えば、「西洋の覇道の手先になるか、それとも東洋の王道の干城か、これは日本人自身が決めるべきことだ」という有名な神戸での演説（「大アジア主義」）があります。

王道論について私なりに簡単に言いますと、一つは陽明学的な良知論と言いますか、「万物」の中に「仁」が存在していて、それによって人々が結びつく。別な言い方をしますと「人の痛みは我が痛み」というような考え方が真ん中にある。この良知論が、それぞれの国家がそれぞれに所を得てきちんと存在し、主張するという、いわゆる大同思想につながります。そして、さらにそれを実現するための政治、それが王道政治（王道論）だというふうに私は理解しております。その王道論ということを根津も非常に重視しています。例えば、書院の第九回卒業式において、「清王朝は王道に外れている。王道に外れた以上は倒れるのは当然である。よって私はむしろ中華民国の発展を祈ると共に、その前途のますます盛んなることを願う」と言っています。要するに、「清王朝が崩れたのは王道に反したからだ。そしてむしろ王道を持った孫文に導かれた中華民国の将来に期待する」というようなことを述べているわけです。

東洋的な王道論者の根津ですが、一方ではマルクス主義、西欧デモクラシー思想に対する理解をちゃんと持っておりました。根津一は非常に皇室に対する尊敬の念が強い。これは事実です。しかし、当時の日本人の知識人、特に明治時代、大正時代はほとんどの知識人がそうであっただろうと思いますので、それをもって「右」というような議論は笑止千万だと思います。根津は天皇を非常に尊崇していますが、昭和期の狂信的な右翼論者のように「日本の国体は世界に冠たるわが国体なり」ということは一切言いません。そして、マルクス主義、西欧デモクラシー思想に対しても一定の理解を示しております。西欧デモクラシーというものはやはり西洋の歴史の中で出てきたものであるという当然な背景がある、そしてこれを極めていけば、東洋の王道思想ともつながる可能性も出てくるのではないか、とまで言っています。マルクス主義についても同様です。

ただ根津が案じたのは、その思想のバックボーンなき導入というものは、かえって軽薄なものになるのではないか、ということです。きちんとしたバックボーン持たずに、これらを軽薄に導入すればかえって日本国内に混乱を招くのではないか、ということを言っているわけです。決して思想自体を否定しているわけではない。デモクラシーもマルクス主義も歴史の中できちんと位置づけています。ですから単なる国体至上主義者ではないのです。

具体的な事件に対する根津の意見にも興味深いものがあります。先ほど申し上げましたが、義和団事件、北清事変が一九〇〇年から一九〇一年（明治三三年～三四年）にか

けてございました。それに対して彼は「北清変乱に対する支那処遇案」というのを作成しています。その中で根津は、「一時の利害、一時の得失より打算して軽挙妄動すべきにあらず」、「東洋の大計に照らし」中国の領土を保全しなければいけない、と主張しています。当時、日本の国内でも「支那分割」の声は非常に強かったんですが、根津は公然と中国の保全ということを主張しているわけです。

また一九一五年（大正五年）第一次大戦のさなか、この時にも根津は「時局所感五大綱」を出しておりまして、具体的にはどういうことかと言いますと、「対華二一か条の要求」に対する痛烈な批判です。そんなことをしては、日本は中国に怨まれ、国際的に孤立してしまうよ、というような内容です。その他第一次大戦について根津は、「戦闘が終わった後は即時撤兵しろ。哨戒作業とかその他の業務が終わったあとはすぐ撤兵しろ」「大戦後、日本が中国に対して商権を獲得しようとするなら同時に日本に来る中国資本に対しても同様の権利を与えろ」というようなことを言っているわけです。

また、根津はアメリカの中国侵出に関しては非常に懸念しています。「バックボーンのないところにヨーロッパ思想を導入すると、かえって日本国内が混乱してしまうということを言っている」と申し上げましたけれども、それと同じ文脈で、キリスト教を始めとするアメリカ文化が中国に入ってきた場合、王道論を始めとする名教というものが破壊されるのではないか、そうなった場合は大変ですよ、と言っています。帝国主義が始まった時、一番最初に進出したのが宣教師であるということがよく言われます。これと同じような懸念を根津は持っているわけです。私は最近司馬遼太郎さんの『アメリカ素描』という本を読みましたが、その中で「アメリカというのは自分の正義が絶対的正義だと思って、それを他人に押しつける悪い癖がある」ということを司馬さんは書かれています。これは想像ですが、同じようなことを根津も考えたのかも知れません。

いずれにせよ、こういった根津の考え方が、書院のバックボーンとしてあったのではないかと私は思います。

書院の二番目の特色として経済学重視。これはどちらかと言うと商業系の学校としてスタートしたわけですから、経済学重視は当然ですね。

その次の特色は、日本のどの学校よりも中国語など中国関係の科目を一番重視してきたことです。それを愛知大学が受けついでおりますが、どこの学校よりも中国に対する理解のための教育をやってきた。その中でも特に大旅行。五期生から始まったと言われていますが、その大旅行。戦争が激化する中で大旅行が小旅行になったというようなこともよく言われますけれども、中国中と言いますか、それを超えてカムチャッカ半島からインドシナ、ビルマに及ぶ大旅行。これも決して軍のバックアップを受けるとか、観光地を回るようなものではなくて、行っても何の特典もなく、日本人として初めて足を踏み込む、そういう大地の上を徘徊するようなフィールドワークを実施したわけです（これは藤田先生のご研究に詳しいのですが……）。場合によっては相当な危険に直面した。

夜盗や病気の危険とたたかいながら調査をした。机上の理想化された中国ではなく、プラスマイナスを含めた上で

の中国とはどういうものかということを、書院生は大旅行によって知りました。それが優れた報告書となって『支那調査報告書』とかあるいは『支那省別全誌』という形で結実しました。

それからやはり重要な特色だと思いますのは、中華学生部が一九二〇年（大正九年）に開設され、一九三四年（昭和九年）まで続いたということです。中国人の仲間が入ってくる。そして最初から中国人の教師も同文書院にはいました。当然彼ら（中国人）の思いが日本人学生や教職員にも伝わってくる。例えば中国人の先生が、日本の国策には批判的だけれども、日本の学校で授業をしなければいけないという思い、また、日本の学校で学んでいるけれども中国はこれでよいのかという学生の思い、そういう非常に屈折した複雑な思いが常に伝わってくる。

また、書院では、日本を批判する壁新聞が張り出されるようなこともありました。また、中国人教員の中には、日本の国策を批判するような論文を公然と書院の紀要に載せるような人物もいました。そういう経験を書院生はするわけです。

その他、日本共産党の大弾圧が日本国内で始まった後も、図書館に行けば社会主義の本が読める。そういうリベラルな雰囲気が存在していた。

このような独特な学風。あくまでも中国に対してジェントリーに振る舞い、領土の割譲には絶対反対というような、王道を基とした根津精神。日本のどの学校よりも恵まれた中国関係の授業。そして机上のものではない、実感としての中国の体験（大旅行）。そして中華学生部。さらにはリベラルな雰囲気。こういう特色を見た場合、非常に単純な疑問ですが、こういった教育環境の中から果たして日本帝国主義の尖兵が生まれるのか、という疑問が出てくるわけです。やはり日中の現状に対し心の痛みを持ったような人々が出てくるのではないか、そういう気が致します。このような教育環境で学んできた人達を、「帝国主義の尖兵」と一刀両断的に言えるのかという、単純と言えば単純ですが、そういう疑問を私は持っております。

それではこういう環境で学んだ青年達が、どういうふうに日中関係者の中で働いたかということですが、何人かの例をあげたいと思います。まず有名なところでは、愛知大学に膨大な資料が入っていますが、山田良政・純三郎兄弟、特に山田良政さんは南京同文書院教授でしたが、結局一九〇〇年（明治三三年）の恵州起義に参加して処刑されるんです。その時に当時の日中関係を考慮して向こうの指揮官が、どうもお前は日本人だろうと質すわけです。日本人であれば釈放されることになったのですが、自分はあくまで中国人だと言うことによって処刑されてしまう。それと山田良政の弟子である櫛引武四郎、この人もまさに師の後を追うように第二革命に殉ずる。そして、良政の弟純三郎は、孫文のいわば日本人秘書として、孫文の死に至るまで献身的に彼を支えました。

次に、先ほどの小崎先生のお話にもございましたけれども、米内山庸夫。青森県立文書館に所蔵されている未公刊資料の中に、米内山の若い時の、当時のリアルタイムの回想があります。「支那の革命党に対しては同志的感情を持って同情し」、「革命のために捧げる血に対して一種の憧憬を

持っていた」「支那の青年が革命を企て、血に染んで斃れるごとに」、「それと同じように青春の血を湧かしていた」。当時の書院生についてそこにはこういうことが書かれています。非常に中国革命に対して同文書院生が同情的であったことがわかります。そして、米内山自身、日中戦争のさなかに、外交官でありながら公然と政府の対中政策を批判する論文を外務省の機関誌に載せています。

それからゾルゲ事件とか満鉄事件というような、当時の言葉で言えば「共産党の謀略」と言われたことにも書院出身者が多く関係しております。これをどう扱うのかということは難しい問題ですが、一つ言えることは、日本の国策に対して批判的な人達はやはりいたということです。

そして石射猪太郎です。この人については、先ほど小崎先生がご報告くださいましたので省略致します。ちなみに石射猪太郎の自叙伝『外交官の一生』の解説の中で、私の恩師である橋川文三先生は石射について「最も良心的な外交官」と述べています。また書院についても、「建学精神はどこまでも中国を援けてその改造を促進することにある」と書いております。私も全く同意見です。

このような思いを抱いた人々が、昭和という時代になって激しいジレンマに直面します。日中関係をどうにかしなきゃいけない。また、自分達が関われば何らかの流れができるのではないかという思い、そして中国に対する知識は豊富。その結果として国策に協力したということは否定できないと思います。このような彼らに対しては、当時から中国側からは「帝国主義」という批判があったと思います。反面今度は日本の心ない人々からは「書院出身者は現地人の肩を持ちすぎる」というような批判もなされました。そういう双方からの批判を被る。こういう中で自分はあくまでも日中関係の架け橋になりたいと思いながらも、結局自分達は何をしているのだろうという思いに駆られる。この点について私は「引き裂かれたアイデンティティー」という論文を書いたことがあります。そのままではないですが次のような内容のことを書きました。

軍国主義という時代だからこそ、かつて根津一が「興学の要旨」の中で語った「一ニハ以ツテ中国富強ノ基ヲ樹テ、一ニハ以ツテ中日輯協ノ根ヲ固ム」という言葉は顧みられなければならなかったはずである。また軍国主義という時代だからこそ、「内部の人」としての批判を持ち続けていた書院生の存在が大きな意味を持っていたはずである。だが、「興学」の理想を実現し、「内部の人」としての批判を生かすためには、東亜同文書院は存続し続ける必要があった。そして「現地人の肩を持ちすぎる」という批判を常に背負っていた東亜同文書院が、この時代に存続し続けようとするためには、皮肉なことに日本への「貢献」が必要とされたのである。そして結果として日本の国策に力を貸すことになった書院関係者・書院生たちは、理想と現実の狭間で自己のアイデンティティーを喪失させていくのであった。

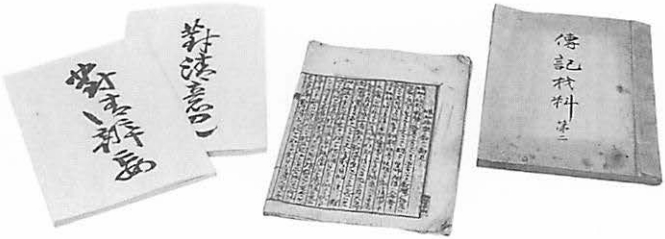
ちょっと固い表現をしておりますが、要するに何とか現状をプラスの方向に持っていこうとして、東亜同文書院生や書院関係者は非常に苦しんでいたということです。

最後になりますが、東亜同文書院の遺産は何かということです。日本で一番優れた中日辞典である愛知大学の『中

日大辞典』とか、大旅行の結果であり、現在でも中国の地誌事典として充分価値のある『支那省別全誌』。この本については、中国側でも非常に評価されている方がいらっしゃいます。こういう物的遺産。

それから人的遺産。これは先ほどの小崎先生のご報告と全く同意見です。それから精神的遺産。これは私の論文にありますが、「歴史の流れの中に身を置きながら、その時々に与えられる現実を前提とした上で（外からあるいは後から批判するのはある意味で簡単です）、即ち与えられた状況の中で理念と良心を保ちながら、現実をプラスの方向に持っていこうとする精神の典型」を、書院や書院の出身者に見ることができると思います。これは現在でも非常に評価されるべき精神遺産だと思います。

時間を超えてしまいました。ご静聴ありがとうございました。



荒尾精が書き記したもの

右から順に『伝記材料第二』、『媾和締盟ニ対スル鄙見』、『対清意見』（1894年10月、復刻版）、『対清辨妄』（1895年３月、復刻版）。日清戦争当時の国民世論に反し、広く大局を見て冷静に判断すべき事を訴えた。1896年（明治29年）台湾にて逝去。まだ十分活躍できる38歳であった。

「至誠如神」根津一書

『愛知大学東亜同文書院大学記念センター　収蔵資料図録』より

配布資料　（栗田尚弥）

はじめに

第二次大戦後の東亜同文書院に対する評価は極めて厳しいものであった。すなわち内外の多くの研究者が、東亜同文書院の日本への「貢献」を重視し、同校を「日本帝国主義の尖兵」「スパイ学校」「植民学校」と位置付けてきた。確かに、東亜同文書院や書院関係者・出身者がその中国に関する情報や知識の豊かさの故に、日本の大陸政策に「貢献」したことは否定できない（資料①）。しかし、東亜同文書院を歴史上に位置付けようとするならば、書院や書院の関係者・出身者が、近代の日中関係史にどのように、またどのような思いを持って関わったかを考える必要があるのではないか？

1　荒尾精と日清貿易研究所

（1）漢口楽善堂と「復命書」（一八八九）―「貿易富国論」「商権恢復」「亜細亜振興」

（2）日清貿易研究所の設立（一八九〇）―日清貿易のエキスパート養成が目的、所長荒尾精、代理所長根津一

（3）「対清意見」（一八九四、日清戦争義戦論）と「対清弁妄」（一八九五、領土割譲・賠償金反対）

2　近衛篤麿と東亜同文書院

（1）近衛篤麿―白人帝国主義への懸念と日本人の「欧洲人と合奏して支那亡国を歌ふの軽浮」を批判（「同人種同盟、附支那問題研究の必要」一八九八）

（2）「支那問題の真相を研究」の必要―同文会そして東亜同文会（一八九八）の設立へ（資料②）

（3）中国エキスパートの養成―南京同文書院設立へ（資料③）（一九〇〇、一九〇一には上海に移転し、東亜同文書院となる）、院長根津一

3　東亜同文書院教育の特色

（1）初代院長根津一

Ⅰ王道論（資料④）

Ⅱマルクス主義、西欧デモクラシー思想に対する理解

Ⅲ「北清変乱に対する支那処分案」（一九〇〇）―「一時の利害、一時の特質より打算して軽挙妄動すべきにあらず」、「東洋の大計に照らし」中国の領土保全を主張

Ⅳ「時局所感五大綱」（一九一五）―対華二一か条の要求を批判（資料⑤）

Ⅴアメリカの対中侵出に対する懸念（資料⑥）―特にキリスト教による文化侵出を懸念

（2）経済学重視、中国語等中国関係科目の重視

（3）大旅行（資料⑦）―カムチャッカ半島からインドシナ半島、ビルマにおよぶ大旅行、「大地の上を徘徊」（藤田佳久「東亜同文書院学生の中国調査旅行コースについて」）するフィールドワーク。机上ではない実感としての中国経験―『調査報告書』『大旅行誌』『支那省別全誌』として結実

（4）中国人教師の存在、中華学生部の開設（一九二〇―一九三四）―中国人教師、中国人学生に対する共歓共苦感の醸成（資料⑧）

（5）リベラルな校風―図書館に左翼文献、学内紀要に日本批判の論文（資料⑨）など

↓以上のような教育から果たして「日本帝国主義の尖兵」が生まれるか？

4　日中関係史の中の東亜同文書院

（1）中国革命と東亜同文書院

Ⅰ山田良政（恵州起義、一九〇〇）と櫛引武四郎（第二革命、一九一三）

Ⅱ米内山庸夫の回想―「支那の革命党に対しては、同志的感情を持つて同情し」、「革命のために捧げる血に対して一種の憧憬を持つていた。」「支那の青年が革命を企て、血に染んで斃れるごとに」、「それと同じように青春の血を湧かしていた。」（『支那報告書』未公刊・青森県立図書館蔵）

（2）対華二一か条の要求に対する反対

Ⅰ根津の反対意見（先述）

Ⅱ書院生たちの批判（資料⑩）

（3）ゾルゲ事件（一九四一）・満鉄事件（一九四二）と東亜同文書院出身者

（4）十五年戦争下の書院外交官

Ⅰ宇都宮直賢少将の評価（資料⑪）

Ⅱ石射猪太郎の場合（資料⑫）

Ⅲ米内山庸夫の場合（資料⑬）

―「（東亜同文書院は）義和団事件以来、列強の中国分割の形勢が進行するのに対抗して、いわゆる『中国保全論』の立場から日中の学生を教育しようとするものにほかならなかった。ただ、このころから、日本の対アジア政策は帝国主義の傾向を強めはじめたため、同文書院出身者はのちにしばしばその手先のように見られることにもなったが、その建学精神はどこまでも中国を援けてその改造を促進し、日中友好を基礎としてアジアの平和を追求するという善意であった。」（橋川文三「石射猪太郎の対中国理念」『橋川文三選集』七）

5　揺れる書院アイデンティティー

（1）日中関係の複雑化と国策への書院の「貢献」

（2）日中双方からの批判

Ⅰ『打倒日本帝国主義』のシュプレヒコール」（一九三六／一〇魯迅葬儀の日、『東亜同文書院大学史』より）

Ⅱ「現地人の肩を持ちすぎる」（石田達系雄『満洲建国物語』）

（3）揺れるアイデンティティー（資料⑭）

―軍国主義という時代だからこそ、かつて根津一が「興学の要旨」の中で語った「一二八以ツテ中国富強ノ基ヲ樹テ、一二八以ツテ中日輯協ノ根ヲ固ム」という言葉は顧みられねばならなかったはずである。また軍国主義という時代だ

からこそ、「内部の人」としての批判を持ち続けていた書院生の存在が大きな意味を持っていたはずである。だが、「興学」の理想を実現し、「内部の人」としての批判を生かすためには、東亜同文書院は存続し続ける必要があった。そして、「現地人の肩を持ちすぎる」という批判を常に背負っていた東亜同文書院が、この時代に存続し続けようとするためには、皮肉なことに日本への「貢献」が必要とされたのである。そして、「結果」として日本の国策に力を貸すことになった書院関係者・書院生たちは、理想と現実の狭間で自己のアイデンティティーを喪失させていくのであった。（参考　栗田尚弥「引き裂かれたアイデンティティー東亜同文書院の精神史的考察」ピーター・ドウス、小林英夫編『帝国という幻想』）

最後に—東亜同文書院の遺産

（1）物的遺産（資料⑮）

（2）人的遺産—研究者、外交官、経済人、新聞人、中国人（書院出身者）

（3）精神的遺産—歴史の流れに身を置きながら、その時々に与えられる現実を前提としたうえで、即ち与えられた状況の中で理念と良心を保ちながら、現実を「プラス」の方向に持っていこうとする精神の典型

資料①

表　東亜同文書院卒業生進路一覧（昭和一二年～一六年）

	昭和一二（一九三七）年度	昭和一四（一九三九）年度	昭和一六（一九四一）年度
南満洲鉄道	6	5	3
満洲中央銀行	12	15	8
満洲電線			
満洲炭鉱			
満洲林業			
華中鉱業			
華中水電			
華中蚕糸			
華中鉄道股份			
華北交通			
華北石炭販売股份			
瀛洋行			
中華全国火柴産銷聯営総社			
上海紙業			
三井物産	3	4	2
東洋拓殖			2
北支棉花	1	1	1
横浜正金銀行	2		
三菱商事	1	3	5
三菱重工		4	2
三菱銀行		1	1
三菱倉庫		1	1
住友金属	1	2	1
住友銀行			1
住友本社			1
日本電気	1	2	
朝鮮銀行	2	1	3
台湾拓殖			1
東洋拓殖			1
日立製作所大連営業所			3
日本偽鉄子	1	1	
大日本製酒		2	1
東京海上火災	1	1	
大日本人造肥料	1		
伊藤忠商事	1	3	2
丸紅商店		2	2
東洋棉花	2	3	2
岩井洋行		1	3
満洲電業	2	2	2
吉河電気工業	2	2	2
大阪商船	2	1	1
兼松商店	1	2	1
鈴木味の素	2	4	4

	日清汽船	紡績機械用品商	江羽紡績	岸和田紡績	豊裕紡績	三昌洋行	わかもと本舗	大倉商事	並木製作所	松下電機貿易	昭和製鋼所	阿部市洋行	上海紡織	大日本精糖	丸永商店	日本染料輸出護模	日本染料製造	本沢商店	盛京時報	満洲拓殖	東洋葉煙草	浅野物産	東亜製粉	安宅商会	大同紡績	東洋紡績	東亜海運	日本油脂	日商	阪毎	大日	武田長兵衛商店	東辺道開発	岩井情報部	南洋局留学生	江登部隊本部関	逓信海希望	外務省	興亜院	日本銀行
	1	1			1	1	1	1		1	1	2	1		2				1	1																				
	2	4		1	1	1				3	3	2		1		1	1	1																		2	2	1	1	
																		1																				4		

	維新政府	東亜同文書院	中華民国新民会	自営・自宅
				4
	1	1	6	2
			2	1

出典：東亜同文会『事業報告書』（昭和一一年度下半期、一三年度下半期、一五年度下半期）より作成。

資料②

東亜同文会主意書

日清両国の交や久し文化相通し風教相同じ情を以てすれば則ち兄弟の親あり勢を以てすれば則ち唇歯の形あり其玉帛往来して古より渝らざるものは天理の公に出で人道の正に発するに因れり豈彼の環興列国の朝婚夕冠互に相攘奪する者と同じからんや何んぞ図らん前年旻天弔せず兄弟牆に鬩ぎ而して列国隙に乗じ時局日に難なり嗚呼愆を忘れ嫌を棄て外其侮を禦ぐもの豈に今日の急に非ずや此時に当りて上は即ち両国政府須らく公を執り礼を尚び益々邦交を固ふすべく下は則ち両国商民須く信を守り利を共にし弥々隣誼を善くすべく両国士大夫則ち中流の砥柱となり須らく相交るに誠を以てし大道を講明し以て上を助け上を律し同じく盛強を底すべきなり是れ我が東亜同文会を設くる所以なり請ふ両国大夫同じく此済に生れ同じく此の時に志す者此意を賛し此会に入り以て力を戮せよ。

明治三十一年十一月　　東亜同文会

発会決議

支那を保全す

支那の改善を助成す

支那の時事を討究し実行を期す

国論を喚起す

東亜同文会規則

第一条　本会は本部を東京に置き支部を支那各地に置く

第二条　本会は会長一名幹事五名会計書記若干名を置き幹事五名の内二名を常任とす

第三条　会長は大会に於て撰挙し其任期を一年とす

第四条　幹事は大会に於て撰挙し会長の承諾を得て就任し会長を補佐して百般の会務を処弁す而して其任期を一年とす

幹事に欠員を生じたる時は会長の指名に由り補欠することを得

（以下略）

資料③　南京同文書院（東亜同文書院）興学の要旨

（根津一起草、一九〇〇）

興学の要旨

中外ノ実学ヲ講ジテ、中日ノ英才ヲ教エ、一ニハ以ツテ中国富強ノ基ヲ樹テ、一ニハ以ツテ中日輯協（友好協力）ノ根ヲ固ム。期スル所ハ中国ヲ保全シテ、東亜久安ノ策ヲ定メ、宇内永和（世界永遠の平和）ノ計ヲ立ツルニ在リ。

中国ノ東亜ニ於ケルヤ、封土民衆ハ並ビニ什ノ九ニ居リ、其ノ日本ニ於ケルヤ、書ハ其ノ文ヲ同ジクシ、民ハ其ノ俗ヲ同ジクス。誼ハ則チ隣友、情ハ則チ兄弟、唇歯ノ形ナリ、虞虢ノ勢（相互密接の関係）ナリ。其ノ安危興亡ハ、独リ中国官民ノ休戚（喜憂）タルノミナラザルハ、識者ヲ待タズシテ知ラル。且ツ夫レ四百余州ノ広土ハ、宇内ノ雄図ヲ尽セルニ、統治ノ綱ハ内ニ

（以下略）

資料④　根津一と王道論

清朝の国を建つる其政治組織たる強て満漢箝制を以て準とし、初より偏あり陂あり王道の旨と相い容れず其歴数の久しからず、必ずや革命の運に遭到するもの識者の夙に洞鑒する所にして、其社稷の遂に終を告て中華民国の興る、洵に止むを得ざるの勢歟、国家既に此の一大変局を経たり、其結果豈一得一失なきを得んや、今試に類推帰納を以て其跡を考ふるに蓋し其得る所或は形而下にして近きものあり、其失ふ所或は形而上にして遠きもの在り其得失を計画して支那現未の情勢を揣るに吾人は民国の発達栄光を祈ると共に其前途の益多端なるべきを感ぜずんばあらず（東亜同文書院第九回卒業式における式辞、一九一二／六）

資料⑤　根津一の対華二一か条批判

元来彼の二一か条は日本の不正義に由るものものにして、独り支那国民之れを暴戾視するのみならず、支那在留諸外国人も其の日貨排斥を以て日本の自業自得となす所、惟ふに汝に出たるものは汝に反る。自ら犯すの罪は宜しく之れを自ら償はざるべからず。（「時局所感五大綱」、一九一五）

資料⑥　根津のアメリカ警戒論

I

亜米利加ガ事今年ノ春突如トシテ持出シマシタ満洲鉄道ノ中立問題ト曰ヒ、団匪事件ノ賠償金無慮三千五百万円ヲ一昨々年学生派遣ノ条件ノ下ニ棒引ニシタコトヽ曰ヒ、中々対清計画ガ大仕掛ノヤウデアリマスガ、今度現ハシタ一億円ノ借款問題ハ日本ノ対清経営ニハ重大ナル関係ガアルダ

ラウト思ヒマス（明治四三年度東亜同文会秋季大会での発言、一九一〇／一二）

II

亜米利加の風が支那の社会に段々と拡まると、其の結果はどうなるかと云ふと、名教と、相容れないことになりはせぬか。—中略—若それに因り社会に根本的変動が起こりましたならば、随分危険なことではなかろうか（大正三年度東亜同文会春季大会での発言、一九一四／五）

資料⑦　大旅行

I

或ハ革命ノ戦間ヲ彷徨スルアリ　或ハ汎濫淹溺ニ遇フアリ　或ハ土匪郷棍ノ包囲スル所トナリ或ハ猺苗瘴癘ノ境ニ陥ルカ如キ其危険辛艱到底世人想像シ能ハサル所」（根津一『支那省別全誌』序文）

II

夜六十清里を下つて舟を停む、初更船頭の黄な声で揺り起さる、曰く賊あり岸に来つて吾舟を襲はんとすと、幸に老爺槍刀の用意あらば吾等の為め、防護を賜へと、誠や岸上数人の声を聞く—中略—腰には上海以来放しもやらぬ拳銃が泣いて居る、来らば来れ、再び起つ能はざるに至らしめん、折角待ち設けた珍客未だ見えずして夜は明けた（第七期生の大旅行誌『一日一信』、一九〇九）

資料⑧　中国人教師・学生への思い

I

私たちの学校の教師朱先生（中国語講師・朱蔭成—引用者注）は、中国社会のこの現状について、授業時間にこういう言葉を教えてくれた。『打我、我打的国内的打仗』（直訳すれば、あなたは私を打つ、私はあなたを打つという国内戦争の意—原注）。そのときの先生の口調と表情が、いまも私の印象に残っている。朱先生は、やせた物静かな長身の老人で、いつも馬掛をつけ、きちっとした中国服を着た、見るからに『夫子然』たる老教師だった。その朱先生の言葉には、限りなくくり返される軍閥の混戦、そして一歩一歩と帝国主義列強に蚕食されて行く祖国の姿、民族の屈辱と人民の苦しみにたいするやりきれない思いがこめられていた。だが自分は老境にあり、まったくの非力、『どうにかならないものか！』と訴えておられるように、私には思えてならなかった。しかもその日本人の学校で、生活のためとはいえ、教鞭を採らねばならない自分を、自ら責めておられるような気がして、私は気の毒でならなかった。後日、日中戦争がおこり、戦局が大東亜戦争へ発展するなかで、中国人教師の程先生（中国語講師・程僕洵、早稲田大学出身—引用者注）が自殺されるという悲劇も起った。（西里竜夫『革命の上海で』）

II

恐怖と怒りが入り交じり、上海全市が重苦しい空気につつまれていたちょうどその頃（一九二七年の蔣介石による四・一二虐殺事件の頃—引用者注）のある朝—講義が始まる前だったが—私と仲が良くて、よく机を並べて学校の講義を聞いていた同学の劉冠相が、そっと私にささやいた。

『自分は、この民族興亡のときに、じっとここで自分の安逸をむさぼっていることがどうしてもできない。僕は、

ペンを捨てて、革命運動に参加する！』

私は、劉君のこの言葉にびっくりした。返す言葉もなかった。

―革命運動に参加するということは、敵の血の弾圧とたたかうということだ。それは文字通り生死をかけた仕事だ。しかもこの上海の街には、白色テロルの嵐が吹き荒れている。その嵐の真っ只中に、自ら突きすすんでゆこうとするのか―私には、そのときあばた面の劉君の顔が、崇高に輝いているように見えた。それは、ただ単なる青年の情熱の爆発といった単純なものではなかった。

私は、わけもなく感動した。そして、ただ劉君の顔をじっと見つめていた。劉君は、呆然としている私にただ一言、〝再見、再見！（さようなら！）〟と、別れの言葉を残して立ち去った。私は、さようならも言わず、激励の言葉を贈ることも忘れて、劉君を見送るだけであった。

それっきり彼は、学校から姿を消した。その後の消息は、まったく不明だが、おそらく彼は、革命運動にその生命を捧げたのであろう。

劉君は、人間が真に生きるということはどういうことか、真実の人生とはどういうものなのかを、私につよく教えてくれた。私は、劉君こそ、私の人生に一つの転機をつくってくれた人間だと、今日もなお信じている。劉君の面影は、五十年後の今日も、私の胸に生きつづけている。（同上）

資料⑨　中国人教員の日本批判

租借国に取つては政治経済的侵略を唯一の目的となしておるが故に、公安秩序を紊さゞる範囲内に於て租借民の個人的腐敗と、堕落とは問ふ所ではない。否、時としてはむしろ手段的に利用し、甚しきは之を奨励することに依て租界の繁栄策を計らんとする。凡そ一国の領土内に於ける国民は其母国の支配下に置かるべきを至当と信ずる。何故ならば『子を思ふ真の愛情を有するものは唯彼の親のみである』からである。然らば上海租界の如く外国の植民地となつておる限り此の社会的欠陥を除く点から見ても大いに問題として考ふべきではなからうか。（中華学生部助教授・彭阿木「東亜同文書院商務学士」「上海の売笑婦」『支那研究』一八号、一九二八）

資料⑩　対華二一か条後の日本官民に対する書院生の批判

（書院生が）四百余州を歩いて孤軍奮闘して祖国と中国の楔になって親善を築き上げる後から不可解な官僚軍閥及我利我利の資本家何も解らぬ支那ゴロ等が寄ってたかって毀って仕舞う（第一八期生の大旅行誌『粤射隴游』、一九二〇）

資料⑪　宇都宮直賢の回想

同文書院を出た、若杉要・石射猪太郎・堀内干城・山本有一らは一癖も二癖もある人物ばかりで、外務省に人なしと悪口された時代に、敢然として軍部に盾をつき、気を吐いたことは、いかに同校が人材教育に努めたかを如実に物語る。（『黄河・揚子江・珠江』）

資料⑫　石射猪太郎の各事変観

―満洲事変

リットン卿を正座にして、並みいる一行に対した私は被告的立場を感じた。省みて身に恥じずる覚えはないのだが、知っている真実の全部をいい得ないのにいい知れぬ後暗さを感じた。（『外交官の一生』）

II　上海事変

無名の師だ。それがもとだ。日本は先ず悔い改めねばならぬ。然らば支那も悔い改めるにきまつて居る。日支親善は日本次第と云ふ支那の云ひ分の方が正しい。（『石射猪太郎日記』一九三三年八月一五日の項）

III　日中戦争

此ノ事変ニ結末ヲ付クルニ非ザレバ我国力ノ消耗ニ北叟笑ム英蘇其他ノ乗ズル所トナリ我国ノ将来ハ遂ニ取返シ得サル破綻ト屈辱ニ直面」（「今後ノ事変対策ニ付テ考案」外務省百年史編纂委員会『外務省の百年』）―①寛容の度量を持し、中国側の面目を立てる、②主権に制限を加えない、③蒋介石の下野を要求しない、④内政不干渉、⑤国民党の解消を要求しない、⑥経済提携に重きをおくことなどを提言、さらに中国の力を過小評価することの危険、日独伊三国防共協定（一九三七年締結）の愚を指摘

資料⑬　米内山庸夫の日中関係論

I

支那人を指導するとか、善導するとか、いたはり導くとか、日本が亜細亜の盟主として支那に望むだとか云ふ態度の如き、例令それが善意であつてもそこに優越感、不平等観が現はれて居り、支那人に好意を与へない。かう云ふ態度は止すべきである。（「上海に於ける紡績罷工と日支関係」『支那』第一六巻第四号、一九二五／四）

II

日支親善の癌はその相容れぬ民族的相違にあるのではなくて、その民族的相違を知らずおのおの自らを以て他を律することにあるのではないか。この点我々はもう一度胸に手をあて、考へて見る必要があると思ふ。大陸に於ける両民族、おのおの、その伝統と、その民族的特徴とを生かして、それを相知り、相認めつゝ提携をはかるところに、却つて、ほんたうの親善提携が現れるのではないかとも思はれる。（『支那の現実と理想』一九四二）

III

汪兆銘工作を否定→斎藤隆夫の反軍演説に影響→外務省辞職

資料⑭　第三四期生の苦悩

通訳従軍によって戦争の現実を直視した三四期生は、書院生として当初抱いた従軍の理想・信念が脆くも打ち砕かれるのを感じた。大きな矛盾をはらみながら堂々と戦争が遂行されていく巨大な力の前に、如何ともなし難い自己の無力を痛感するままに、従軍中に学校側が親心で決めてくれた就職先を拒否する者が続出し―中略―世俗を超越した虚無感が同期生の多数を支配したのである。（『東亜同文書院大学史』）

資料⑮　現代に生きる遺産

客観的に評価すれば、この同文書院の社会経済調査は、旧中国政府時代のいずれの調査よりも規模が大きく、詳細正

確であったといえる。今でも、この数千冊の調査報告書は、近代中国社会の研究のために得難い資料だと考えられている。―中略―東亜同文書院の教員は、日本における中国研究の基礎を確立し、多くの人材を養成した。日本の敗戦とともに、同文書院もついに上海から姿を消したが、今に至るも両国に深い影響を与えている。―中略―書院時代から今日にかけての日中教育学術交流における歴史的意義はゆるがせにできない。同文書院のこの方面における活動は、これからも深く研究されるべきだと思う。（蘇智良「上海師範大学」「上海東亜同文書院について」霞山会編『東亜同文会史論考』）。

栗田尚弥（くりたひさや）

履歴

一九五四年　東京都出身
一九七七年　中央大学法学部卒業
一九八三年　明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻博士後期課程単位修得

現在　國學院大學文学部講師、中央大学社会科学研究所客員研究員

専攻　日本政治外交史

著作等

『上海東亜同文書院』・新人物往来社・一九九三年
『東亜同文会史』・霞山会・一九八八年（共編著）
『東亜同文会史論考』・霞山会・一九九八年（共著）
『帝国という幻想』・青木書店・一九九八年（共著）
『東亜同文会史　昭和編』・霞山会・二〇〇三年（共編著）
『相模湾上陸作戦―第二次大戦終結への道』・有隣堂・一九九五年（共著）
『帝都と軍隊―地域と民衆の視点から―』・日本経済評論社・二〇〇二年（共著）
など

（ここで李先生の発表がありましたが、巻末へ掲載しています。）

（休憩）

藤田

では後半の部へ入りたいと思います。本日三人目の発表をしていただきます藤井昇三先生は電気通信大学の名誉教授でいらっしゃいまして、日本における孫文研究の第一人者であり、孫文に関する多くの著作を出されています。本学の東亜同文書院の記念センターには、すでに説明がありましたように山田順造氏から寄贈された父上兄弟の孫文関係のコレクションが所蔵、展示されています。孫文はいうまでもなく近代中国の樹立を理論的にかつ運動論として実践し、今日の中国の基礎をつくりました。その孫文の思想がどのように形成され、発展したのかを本日は伺えるものと思います。講演のタイトルは「孫文と近代中国」です。では先生、よろしくお願いいたします。